

## ダンの『聖なるソネット』における葛藤について

竹 永 雄 二

(英米文学研究室)

### はじめに

一般読者の素朴な印象として、ダン (John Donne, 1572-1631) の宗教詩に不満を感じるのは、それが読者が宗教詩に期待する深い静寂感、あるいは安息感を与えてくれないことである。特にダンの宗教詩の中でも『聖なるソネット』 (*Holy Sonnets*) は、激しい、果てしない葛藤の連続で、彼の恋愛詩と同じように、意外性への驚きや知的興奮は与えてくれるが、密やかな、静かな心の喜びを与えてくれるものはほとんどない。このことはダンと同時代の宗教詩人、同時にイギリス文学において最高の宗教詩人の一人であるジョージ・ハーバート (George Herbert, 1593-1633) の宗教詩と比較してみれば一層明らかになる。ハーバートの唯一の宗教詩集『神殿』 (*The Temple*, 1633) は、自らが述べているように神と彼自身との「葛藤」 (conflict) の記録である。しかしそこには葛藤が終息した時の春の日の訪れのような喜びに満ちた詩もあり、葛藤の最中であっても黒雲の中から差し込んでくる希望の光を表した詩もある。ハックスリー (Aldous Huxley, 1894-1963) が変わりやすいイギリスの天候にたとえて巧みに表現したように、『神殿』は目まぐるしく変化するハーバートの「心模様」 (inner weather) である。

The climate of the mind is positively English in its variableness and instability. Frost, sunshine, hopeless drought and refreshing rains succeed one another with bewildering rapidity. Herbert is the poet of this inner weather.<sup>1)</sup>

変化の中の瞬時のものではあっても、この霜の後の陽光が、干ばつ後の慈雨がダンの宗教詩には欠落している。このような欠落は何を意味するのであろうか、また評価するとすればどのようにしたらよいのであろうか。素朴な疑問を手掛かりとして、特にここでは宗教詩の中でも複雑な展開を見せる『聖なるソネット』 (*La Corona* を除く19編のソネット) を中心に読み解いてみたい。

ヘレン・ガードナー (Helen Gardner) は、膨大な文献資料の精緻な実証的分析に基づいて改訂した『ダン宗教詩集』 (*John Donne The Divine Poems*, 1952) の序論の中で、ダンの宗教詩は「意思と気質との間の葛藤から生まれた作品」 (the product of conflict between his will and temperament)<sup>2)</sup> と総括している。確かに妥当な意見ではあるが、さらに踏み込んでダンの葛藤の本質は何であるのかを平易な言葉で説明することは容易なことではない。世俗的栄達の野心と

英国国教会の叙階を受け聖職に就くこととの間の葛藤、女性への肉体的欲望と精神的愛との間の葛藤、秘密結婚のために失職し、病弱な妻や子供に囲まれた、何の将来の展望も得られない彼の暗い中年時代の鬱屈とした精神状況、敬虔なカトリック信者の家に生まれカトリックの教育を受けて育ったのに、現実的に生き延びるためには英国国教会に改宗しなければならないという宗教的葛藤、あるいはローマ・カトリック、英国国教会、プロテスタントの各宗派が激しくせめぎ合い歴史を作り出していく最中であっての純粋な神学教義上の問題、などがこれまで指摘されてきたように思う。これらを最も単純化したものが「放蕩児ダン」(Jack Donne) から高名を馳せたセント・ポール寺院の「主席説教師ダン」(Dr. John Donne) への発展という、ウォルトン(Izaak Walton, 1593-1683) が『伝記』(*The Lives*, 1640) の中で示したダン像である。<sup>3)</sup> ウォルトンの伝記が古典的名著であることは間違いないが、現代の読者にとってはそこに示されたダン像はあまりに美化され過ぎている。その他の説について言えば、事実であるかもしれないが作品の芸術的な質を高めるような読み方につながっていきにくい。さらに最後の教義上の問題になると現在の筆者の知識の及ばない問題である。そこで、本論においてはこのような諸説を考慮に入れながらも、テキストの読み(あるいは書くこと)を中心にしてダンの葛藤の本質は何であったかを考えてみたい。

## テキストについて

テキストは Penguin 版 *John Donne The Complete Poems* を使用する。作品の制作年代については、Westmoreland 写本の 3 編のソネットを除けば、ガードナーの主張する 1609 年から 1611 年の間とする説、つまりそれまでのダンの妻 アン (Anne) の死 (1617 年) 以後に書かれたものという説を覆して、ダンがまだ聖職に就く (1615 年) 前に書かれたものとする説が一般的に受け入れられている。しかしテーマごとにグループ分けした彼女の作品オーダーについては少し異論が出ているようである。ここでは 1635 年版の作品オーダーに従うこととする。その方がペンギン版の編者が述べている通り作品に対して先入観を持つことなく、中立的な立場で臨めるからである。<sup>4)</sup> さらに飛躍するかもしれないが、現代批評の読者受容論の立場からフィッシュ (Stanley Fish) が主張する「テキストの客観的構造ではなくて、読者の経験の構造の解釈」につながるのではないかと思えるからである。<sup>5)</sup>

### 1. 『聖なるソネット』作品解釈、ソネット 1-8 について

この時期のダンには自分の人生を、人間の現世における実存やその平凡な日常性の背後にある精神状況を、宗教的コンテキストから捉え直そうという意図が働いていたように思われる。ソネット 1 にはそのパラダイムが示されている。

I dare not move my dim eyes any way,  
Despair behind, and death before doth cast  
Such terror, . . .

But our old subtle foe so tempteth me,

That not one hour I can myself sustain;

背後には絶望（過去の罪）、前方には死（最後の審判）の恐怖があるのみ。天上からの神の救済を強く望みながらも地獄からの悪魔の誘惑に負けてしまいそうになる詩人。人間のこの世における実存の不安定生が立体的構図で示されている。前後、上下からの強い力の作用の中に自らを位置付けることによって、詩人自身の内的圧迫感、危機感が表されている。葛藤が生じる場の設定と解釈されよう

ソネット2ではソネット1で示された上下の力の作用、言い換えれば神と悪魔の綱引きの複雑な局面が逆説的表現で表されている。どちらも心情とは逆の行為をして詩人を困惑させる。

Except thou rise and for thine own work fight,  
Oh I shall soon despair, when I do see  
That thou lov'st mankind well, yet wilt not choose me,  
And Satan hates me, yet is loth to lose me.

神と悪魔と詩人の関係が、恋愛の三角関係、二人の男性の間で揺れる女性という状況に重ね合わされている。神は精神的には愛しているのに肉体を求めようとしない男性、悪魔は精神的には嫌っているのに肉体関係を続けるもう一方の男性。一つの関係を清算し新しい関係を作り出すのが難しい状況である。脱構築批評の言葉を使えば、解決不能の状況に詩人は置かれている。

ソネット3では絶え間ない苦しみの連続としての詩人の人生が呈示される。罪の快樂も知らず、改悛の安らぎも容易に与えられない。罪も苦しみであり、苦しんだゆえにさらに苦しみという罰を受けている。

Because I did suffer I must suffer pain.

不毛に終わった世俗的愛を断ち切り、詩人は今神を激しく求めようとしている。しかしその神聖な情熱は過去の世俗的恋愛の情熱と同じように満たされることはない。このような満たされない詩人の精神的状況が「神聖な不満」(this holy discontent)という言葉で表されているが、この言葉は『聖なるソネット』全体の中心にある詩人の一つの感情を表していると考えられる。つまり神が詩人の気持ちに答えてくれないという不満である。

ソネット4ではダンの宗教詩によく見られる臨終の場面設定がなされている。それは生と死の狭間、生と死が激しくしのぎを削る場、すべての人間が避けて通ることのできない生と死との緊迫したドラマが演じられる場である。

Oh my black soul! now thou art summoned  
By sickness, death's herald, and champion;

生、または現世への強い執着が二つの比喩表現で効果的に表されている。国外で罪を犯しながら自分の国に帰ろうとしない旅人。国外とは現世、自分の国とは人間の本来の住処であった天上世界を表している。もう一つは、死刑を宣告されるまでは牢獄から解放されることを願い、死刑を

宣告されると牢獄に閉じこめられたままがよいと願う囚人。牢獄とは現実世界、または人間の肉体を表す。

Thou art like a pilgrim, which abroad hath done  
 Treason, and durst not turn to whence he is fled,  
 Or like a thief, which till death's doom be read,  
 Wisheth himself delivered from prison;  
 But damned and haled to execution,  
 Wisheth that still he might be imprisoned;

後半のセステットでは救済への道が示される。心から改悛すれば必ず神の愛が示されるのである。神の愛を得るためにはまず犯した罪の深さを強く自覚することから始めなければならない。喪に服し、罪に赤面すること。そしてキリストの流した血の意味を深く理解すること。そのような過程の中で魂は元の無垢な状態に浄化されていくのではないかとされている。

Oh make thyself with holy mourning black,  
 And red with blushing, as thou art with sin;  
 Or wash thee in Christ's blood, which hath this might  
 That being red, it dyes red souls to white.

結びの一行「キリストの血は赤く罪に汚れた魂を白く染め変える」は宗教詩独特の魔法性を持っていて読者に強い印象を残す。だがそれは T. S. エリオット (T. S. Eliot, 1888-1965) が指摘しているように、ハーバートの優れた詩の持つ深い宗教的体験から生み出された魔法性ではなく、wit によって作り出されたものではないかという印象が強い。<sup>6)</sup> 知性が作り出した解答であり、その一瞬の知的興奮が冷めると依然として解決されてない感覚的問題が残るのではないか。つまり死、そしてその後の審判への不安、恐怖である。

ソネット 5 は水、天体の彼方にあるといわれる神聖な湖（具体的には改悛の涙）と火（信仰の情熱）で魂を浄化せよという内容である。ここでは冒頭の 4 行に注目したい。

I am a little world made cunningly  
 Of elements, and an angelic sprite,  
 But black sin hath betrayed to endless night  
 My world's both parts, and, oh, both parts must die.

人間は諸元素と天使の持つ理性から見事に造られた小世界であるとは、人間は万物の最高傑作であるという盛期ルネッサンスの人間観を表したものだが、ダンの表現法にはアイロニーが含まれていないだろうか。特に 'cunningly' という副詞には創造主である神の狡さ、あるいは人間の愚かな錯覚へのアイロニーはないだろうか。なぜならそれはすぐに罪の手に落ちて、果てしない夜に売り渡されるのであるから。確かに我々はこのような表現の中にルネッサンスの光の時代が終わってその影の時代が始まったことを思い知らされる。それはシェイクスピア (William

Shakespeare, 1564–1616) の悲劇に代表されるように、人間への不信、両面価値に引き裂かれた不安定な精神の時代である。

ソネット6では再び臨終の場面設定がなされる。特にここでは距離や時間を具体的に表す数量名詞の多用、さらに形容詞 ‘last’ の反復が劇的緊迫感を高めている。その緊迫感は死だけでなく、死後に訪れるであろう最後の審判、あらゆるキリスト教徒にとって地獄か、天国かが審判される最も重大な場を予想していることから生まれるものである。

This is my play's last scene, here heavens appoint  
My pilgrimage's last mile; and my race  
Idly, yet quickly run, hath this last pace,  
My span's last inch, my minute's latest point,

ミルワード氏 (Peter Milward) はシェイクスピアの演劇との表現上の類似性を指摘しているが,<sup>7)</sup> さらにマーロー (Christopher Marlowe, 1564–93) の『フォースタス博士』 (*Dr. Faustus*) の最後の場面、悪魔との契約によって与えられた時間が限りなくゼロに近づいていく時のフォースタスの苦悶と、内容的には類似しているように思う。ここでは死と同時に厳しい裁きへの恐怖が葛藤の原因になっていると思われる。

ソネット7では最後の審判が場面設定されている。しかしきわめて重大な場面ではあってもその設定の仕方にはダンの知性の働きが垣間みえる。本来『黙示録』では次のように表されていた。

I saw four angels standing on the four corners of the earth . . .  
(Revelation vii 1)

それをダンは次のように部分修正している。

At the round earth's imagined corners,

地球は丸いとする新しい天文学上の発見に基づき扁平な地球を「丸い地球」と改め、「4角」を「想像上の角」と改めている。真実への鋭い意識が聖典の聖なる表現でさえ盲目的に受容することを許さないのである。だがこのダンの知性が、知的良心が純粋な信仰の障害となり、彼の葛藤の要因になっているとも言える。彼はこのソネットで復活への楽観的な展望よりも重要なのは改悛であり、「この地上で改悛する術を教え給え」と神に願っている。

here on this lowly ground,  
Teach me how to repent;

罪を悔い改めさえすればどんな罪人も許されるというのがローマ・カトリシズムとは異なるプロテスタント主義の考え方であった。しかし強烈な自己中心主義者であり、鋭い知性を持ったダンには、それは楽観的すぎる考え方ではなかったろうか。立場こそ違え、ちょうどクローディアスが自分が犯した罪の深さに神に祈ろうとしても膝を曲げることができなかったように、<sup>8)</sup> ダン

にとっても信仰の中に全ての自己を放棄することが難しかったのではなかろうか。

ソネット8では信仰が客観的に理解されることの難しさが表されている。外に現れた英雄的な行為は叙事詩に記され歴史に残り人の称賛を受ける。しかし心の中での勇敢な戦いはどうやって認められるのであろうか。人は皆心の中で激しく戦い、負ければ地獄の奈落の底に転落してしまうのだ。詩人自身も今勇敢に大きく口を開けた地獄を跨いでいるのだ。

valiantly I hell's wide mouth o'erstride:

さらに心からの罪への改悛の涙も表面的には世俗的求愛の涙と区別することは難しい。それは腹黒い偽善者がイエスの名を呼ぶことと、さらには異教徒の偽りの祈りとどうやって区別されるのか。

They see idolatrous lovers weep and mourn,  
And vile blasphemous conjurers to call  
On Jesus' name, and pharisaical  
Dissemblers feign devotion.

このようにここでは信仰が、心の真実が客観的に理解されることの難しさが表されている。

これまでバラバラな読みをバラバラに並べて敢えて構造化することをしなかった。ダンの葛藤の諸相を呈示しただけである。それはテキストという織物の一本一本の糸を鮮明にしていくという作業の中で何か見えてくるのではと思ったからである。もし構造化するとすれば、読者の作品に対する経験を構造化することであり、それは少なくともこの時期のダンにとっての「神の遠さ」という読者が得た経験によってなされるものだと思える。現実の様々な不条理への疑念に対して神は答えてくれない。そこからの救済の願いに対しても神は冷淡である。さらに問題なのは神と人間との間に横たわる障害物、肉体、世俗世界への執着に視野を閉ざされて、ダンが広い展望を得られないでいることである。つまり神を求める気持ちが純粋に高まっていなかったために、ダン自らが神を遠くしているのではないかということである。

## 2. ソネット9-16について

ソネット9は裁きの場で、詩人は自らの自己弁護に立って有毒な鉱物、禁断の実、好色な山羊、嫉妬深い蛇の重罪と比較して自分の罰が不当に重いと裁判官の神に不服を申し立てている。(法律を学んだダンにとっては得意な場面設定であったかもしれない。)しかしこのソネットの後半では、詩人は一転して神と議論をしようなどということは思い上がった態度であると自らを責めている。

But who am I, that dare dispute with thee  
O God?

議論をすることそれ自体が神を遠ざけてしまうことなのである。ここにも知性と信仰との深刻な

対立の一面が浮き彫りにされているように思う。このソネットの結びで、全ての罪の忘却を詩人は神に請い願っているが、知性の勝ったダンにとっては忘却は簡単なことではなかったろう。

「死よ奢るなかれ」(Death be not proud)で始まるソネット10は『聖なるソネット』の中でも最も激しく、最もよく知られたソネットの一つである。宗教的コンテキスト、さらに時代を超えて、全ての人が共通して抱く死への恐怖をこの詩は払拭しようとしている。このソネットが好まれるのは、詩人の大胆な死への挑戦とその勝利が読者に小気味の良い壮快感を与えてくれるからだろう。しかしそれゆえ内容について少し真面目に議論され過ぎているように思う。言葉の激しさの背後にあるものはもっと単純なもの、子供を喧嘩へと駆り立てる感情のようなものが流れているのではないだろうか。強いストレスを感じている人が無意識に感情をぶつける材料を探すように、詩人は死を好材料とし、それまでの鬱積した感情を発散させているのではないか。詩人は死の恐怖の無意味さを証明するために一気にまくし立てているように思われる。死の似姿である休息や眠りから多くの喜びが得られるのだから、本物の死からはもっと多くの喜びが得られるはずだ。立派な人ほど早く死ぬのは死が肉体の休息であり、魂の解放であるからだ。偶然の事故や、不正な権力者の手に掛かって人が死ぬとすれば、死は単なる偶然や、権力に従属するものでしかない。さらに芥子や魔術が人を死よりもっとよく眠らしてくれる。そして次のように詩人は締めくくる。「短い眠りが過ぎれば我々は永遠に目覚める。そして死はもはや存在しないものとなる。その時死よ、お前が死ぬのだ。」

One short sleep past, we wake eternally,  
And death shall be no more, Death thou shalt die.

詩人は見事に死を撃退している。しかし冷静に再考してみると、言葉が勢いだけで流れているのではないかと思えてくる。言葉の力強さを支える確固とした信仰、深い宗教的体験が欠落しているように思える。この詩は言葉だけの勝利、知的ウィットによる勝利であって、その興奮が冷めてしまうと依然として死への感情的不安は残ってしまうように思える。さらに重要なのは、ダン自身もこのことは十分意識しているのではないかと思える。詩の語り手はダンが作り出したペルソナではないだろうか。ダン自身と詩の語り手の間には距離があり、ダンはこの語り手を冷めた目で見ているように思える。だとすると、このソネットも信仰に完全にコミットできないダンの知的苦悩を表しているのではないかと思えてくる。

ソネット11では裁きの場から磔の場へと瞑想が展開されている。ソネット8、9では自分だけが不当に重い罰を受けているという不満が述べられてあったが、この11番では一転して、自分の罪はキリストを敵に売り渡したユダヤ人にも勝る重く、醜悪なものであると赤裸々な告白がなされている。目の前にキリストの磔の場を瞑想し、その悲劇的現実の重さに耐え得ず、一気に罪の告白がなされたものと考えられる。いくら清らかな信仰生活を堅く心に誓い、実践しようと思図し心から願っても、現実の中で生きていくことは否応なく罪を重ねていくことかもしれない。ぼろ服をまとうことに人の哀れみをひこうという打算が全く働いていないだろうか。苦悩を代償を求めるためではなく、純粹に苦悩として受けとめ耐えていけるであろうか。信仰生活の真実よりも、いつのまにか現実の利害を優先させているのではないか。我々は見えないところで罪を犯しているのである。日々キリストを敵に売り渡し、日々彼を十字架に掛けているのである。その意味では我々はユダヤ人に勝る重罪を犯しているのだ。

They killed once an inglorious man, but I  
Crucify him daily, being now glorified.

このような心情がこの詩に現れた激しい罪の告解の背後に流れているのではと想像される。罪を鋭く意識すること、自己を厳しく罰すること、それは知性の介入を拒否することであり、信仰へと近づいていく有効な方法と言えるかもしれない。

ソネット12でも瞑想の主題はキリストの磔である。その内容を整理すると次のようになろう。人間は自然界の中で万物の頂点にあるが、宗教的に考えればこれは不条理なことである。人間よりも純粋に構成され、罪の汚染の度合いが低い土、水といった元素が、また諸動物がどうして人間に従属させられているのだろうか。しかしさらに大きな謎、または奇跡がある。万物の創造主である神は人間、被造物、さらには敵のために自ら十字架に掛けられたのだ。

But wonder at a greater wonder, for to us  
Created nature doth these things subdue,  
But their Creator, whom sin, nor nature tied,  
For us, his creatures, and his foes, hath died.

この世の不条理に勝る大きな謎、知性ではもはや解明できない謎をこのソネットで詩人は自らに突きつけようとしているように見える。

ソネット13では詩人は自分の心に刻み込まれた十字架上のキリストを直視しようとしている。そしてキリストの苦痛に歪む表情が、両目の涙が、眉間を流れる血が詩人を恐怖に駆り立てるかどうか、キリストの舌が詩人に地獄落ちの宣告をすることができるかどうか、自らに問いかけている。そしてそうではないと詩人は強く否定し、恐ろしい姿は邪悪な心に現れ、この美しい姿は慈悲の心を間違いなく示していると結論付けている。

To wicked spirits are horrid shapes assigned,  
This beauteous form assures a piteous mind.

結論だけ見るとそれなりに説得力のある結びと言えるかもしれないが、結論に至る論理の過程にダンらしい緻密さを感じられない。十字架上のキリスト像が美しいと言えるかどうかはまず問いかけていたはずだ。邪悪な心の持ち主にはそれは恐ろしい像に見えるが、信仰厚き人にはそれは美しく感動的な姿に見えるといった解答がなされるのではという予想が読者にはある。しかし事実これは美しい姿であり、間違いなく情け深い心（詩人に対する許し）を示していると強引に結ばれている。この論理的強引さは意思の力で信仰心を強引に高めようとするダンの心情を表しているように思える。

ソネット14は全体の中でも最も激しい調子のソネットの一つである。その激しさは動詞の連続によって具体的に示されている。詩人は三位一体の神に呼びかけ「自分の心を打ち倒して下さい」(Batter my heart)と言う。これまでのように「ノックし、息を吹きかけ、照らし出す」(knock, breathe, shine)のではなくて、「叩き壊し、吹き飛ばし、燃やし尽くす」(break, blow, burn)することを求めている。なぜなら詩人の魂は神の敵である悪魔の虜となり、その牢



獄に幽閉されているからである。その悪魔との絆を断ち切り、神の許に連れ去り、そして神の虜にしてくれるようにと詩人は強く神に願っている。そして最後は逆説的表現で、「神が詩人を虜にしてくれた時初めて詩人は自由の身となることができるのだ、神が自分を暴力的に犯してくれた時初めて詩人は清らかな身になるのだ」と結んでいる。

Divorce me, untie, or break that knot again,  
Take me to you, imprison me, for I  
Except you enthrall me, never shall be free,  
Nor ever chaste, except you ravish me.

最後の2行の逆説表現がやはり最も注目すべき点であろうか。世俗的、肉体的恋愛表現と神聖な霊的神との関係の落差、表示 (signifier) と表示内容 (signified) の落差に読者は驚く。その落差は人間と神との遠い距離である。その遠い距離をダンは見事な知的早業によって埋めているのである。ここには観念的ではなく、感覚的に神の愛を実感したいというダンの強い願いが、あるいは性的衝動のようなものが表されているように思う。

前詩においては神の働きかけの弱さに対する不満が述べられていたが、ソネット15では冷静に神が、三位一体の神が人間にどれほど強く働きかけているかが確認されている。聖霊は人間の心に神殿を造り、神、あるいは天上世界のメッセージを送る。父なる神は人間を救う子を生み続け、人間を栄光と永遠の休息の共同相続人とする。子なる神キリストは人間の姿を取って地上に降り、人間の贖罪のために磔となる。このソネットでは、冒頭の2行に示されているように、

Wilt thou love God, as he thee? then digest,  
My soul, this wholesome meditation,

激しくなり過ぎた黙想を軌道修正し、冷静に神の愛の現れを考えてみようとする詩人の意図が感じられる。

ソネット16では神の掟の要約、そして神の最後の命令はただ愛することであると結論付け、その神の最後の意志が永続することを祈願して、これまでの16のソネット全体を締めくくっている。

Thy law's abridgement, and thy last command  
Is all but love; oh let that last will stand!

最後にあるのは神の愛。ソネット全体の流れは、その中でのダンの厳しい瞑想はこの神の愛を実感するためになされたのではないだろうか。ゆえに人間への神の愛の具体的な現れであるキリストの受難の場が繰り返し繰り返し瞑想されているのではないか。罪の厳しい裁きよりもキリストによる許し、愛を実感することにあるのではないかと思える。そしてその時彼は世俗への執着を断ち切り、神への道を歩むことを、牧師として信仰生活に身を捧げることを決断できたのではないだろうか。

イグナチウス・ロヨラ (Ignatius Loyola, 1491-1556) の『霊操』 (*Spiritual Exercises*) の影響を指摘して、ダン及び17世紀の宗教詩の解釈に大きな貢献をした L. マーツ (Louis L.

Martzt)は、ダンの宗教詩の本質は「魂の耕作」(the inward farming of the self)にあると述べている。<sup>9)</sup> 確かに本質を突いた卓見である。この「耕作」という言葉(ダン自身が『書簡詩』の中で使った言葉である)<sup>10)</sup>を利用して言えば、ダンの『聖なるソネット』の一つ一つのソネットは、ダンが心という固い大地に振り下ろす鋸の一打一打ではないだろうか。その乾いた大地が美しい緑野となり、壮麗な神殿がそこに建てられたかどうかという結果に対してではなくて、彼の魂の労働の過程に対して、その激しい一打一打に対して我々は評価を与えなければならないように思う。

### 3. ウェストモーランド写本の3編のソネット、ソネット17-19について

ウェストモーランド写本の3編のソネットは、制作年代は正確には特定されていないが、ダンの妻アンの死(1617年)以後の作品と言われている。つまりダンが聖職に就いた後の作品となる。このような伝記的事実から読者はダンが到達した精神的調和、秩序をこれらのソネットに予測するのであるが、予測とは逆にこれらのソネットにも依然として厳しい葛藤が示されている。

ダンの妻アンは1617年8月、12番目の子を出産した後33歳で亡くなった。ソネット17は妻の死という話題から始まっている。妻への愛はダンの心を磨くことであった。不純物を削ぎ落とし最終的には神への愛に至るものであったと詩人は語り始める。

Here the admiring her my mind whet  
To seek thee God;

そして神を見つけ、神は渇きを癒してくれたのに、なお「癒されない渇き」(a holy thirsty dropsy)を詩人は感じている。神は恋ゆえの嫉妬心から、現世に、肉体に、悪魔に詩人の魂が取られてしまうのではないかと心配されているというのに。

But in thy tender jealousy dost doubt  
Lest the world, flesh, yea Devil put thee out.

神への信仰の道を選択した後なのに、現実執着させるもの全てを失ってしまったはずなのに、なお満たされず貪欲に揺れ動く詩人の心を表した詩であるように思われる。人間の魂とはなんと救い難いものだろう。油断するとすぐに悪魔が侵入してくるのである。人間の心は絶えず悪魔と神との間にあって引き裂かれるもの、人生とはその一瞬一瞬が悪魔との戦いではないか、そして決定的な勝利など存在しないのではないか、そんなことを感じさせる詩である。

ソネット18ではキリストに向かって、キリストが選ぶ真実の花嫁、つまりキリストの宿る真実の教会を示してくれるようにと詩人は訴えている。それは対岸でけばけばしい化粧をして歩く者(ローマ・カトリック教会)であろうか、それともぼろ服をまとってドイツとこの国で嘆き悲しむ者(プロテスタント教会)であろうか。伝説に伝えられている1千年の眠りの後に目覚める者であろうか。そしてその女性は一つの丘(エルサレム)に現れるのだろうか、七つの丘(ローマ)に、それとも丘の無い所(ジュネーヴ)に現れるのだろうか。教会を生活、信仰、職務の場として選択したダンの真実の教会の在り方への探求がこのような問いかけとなって現れているのだ

と思われる。ガードナーの指摘している通り、この詩は現実の教会と理想の教会との隔たりを表しているのだと思われる。<sup>11)</sup> 宗派の争い、時間や場所に関する諸説、存在の形態やその求め方の相違など、対立し、分離し、多様な存在形態をとっている現実の教会は、本来人々が理想とした教会となんと隔たっていることか。それに対して理想的な教会とは、真実のキリストの花嫁とは、全ての人に愛され、全ての人に開放されるものではないかと詩人は次のように訴える。

Betray kind husband thy spouse to our sights,  
And let mine amorous soul court thy mild dove,  
Who is most true, and pleasing to thee, then  
When she' is embraced and open to most men.

最後の二行は直訳すれば「多くの男に抱かれ、多くの男に体を開く時、その女性はキリストにとって最も真実で、最も好ましい花嫁である」ということになる。ダン独特の、ダンにしかできない表現である。その強烈なセクシャリティはおそらく現実の教会の閉鎖性、独善性への鋭い風刺ではないかと思われる。英国国教会という一つのセクトを選択し、そこで大いなる成功を収めながらも曇らされることのないダンの良心、飽くなき真実への探求心がこのような表現に示されているように思われる。

全体の最後に位置付けられているソネット19にも、葛藤の解決どころか、その手がかりさえも表されていない。「様々の相矛盾する物が一つのものの中でぶつかり合い自分の心をかき乱す」(Oh, to vex me, contraries meet in one)と詩人は嘆く。詩人はその典型のような生活を送っている。彼の悔い改めの気持ちは、恋愛の心情と同じく変わりやすく当てにならない。「昨日は天を見ようとしなかった。それなのに今日は一心に祈り、饒舌な言葉で神の愛を求める。明日は神の裁きの恐怖で震えるだろう」と、不安定なうつろいやすい信仰心が次のように表されている。

I durst not view heaven yesterday; and today  
In prayers, and flattering speeches I court God:  
Tomorrow I quake with true fear of his rod.

確かに否定的な内容ではあるが、どういう訳かこれまで見てきた詩と比べてみると激しさや苛立った調子が伝わってこない。等身大の自分自身を冷静に見つめているダン、生きていくことは矛盾や葛藤に否応なくまみれるものであることを受容しているようなダンの目を感じられる。これまで検討してきた16編のソネットとウェストモーランド写本の3編のソネットとの間には約10年の制作年代の隔りがある。このような時の経過がこれまでになかった内容的変化をもたらしているように思われる。ソネット17には妻への感謝の気持ちが述べられていた。ソネット18には真実の教会は特定の集団に独占されるものではなくて、全ての人に共有されるものであるという考えが述べられていた。そしてソネット19には自己の救い難さを表しながらも平静に受けとめようとしている視点が感じられた。つまり人間としてのより自然な感情がこの3編のソネットには表されているように思われる。恐らくそれは時がもたらしてくれた変化、ささやかな実りなのであろう。

## 結 び

ダンとハーバートの宗教詩の相違ということから稿を起こしたので再度両者の比較によって稿を閉じたい。T.S. エリオットはダンの詩の語り口は「雄弁家」の語り口であり、激しく情熱的であるが、対照的にハーバートの語り口は静かなささやくような語り口であると言っている。<sup>12)</sup>このような言い方でエリオットは、ハーバートの宗教詩がダンよりも優れていることを主張しているのであるが、両者の作品の優劣は別にして、やはりエリオットの言葉はダンの詩の特質を突いていると思える。ハーバートは田舎の小さな教会の、彼が名前も顔も彼らの日常の生活も知り尽くしている僅かの会衆を念頭に置いて語りかけている。だから自然な説得力ある語り口ができるのである。それに対してダン是不特定多数の様々な階層の、あるいは様々な伝統、文化を異にする聴衆を意識している。だから必然的に不安定な、緊迫した、激しい語り口になるように思う。いわばハーバートは閉じられた体系の中で生きようとした詩人であり、それに対してダンは開かれた価値体系、新旧様々の価値観が混在し、衝突しあう世界に敢然と身を晒し続けた詩人であるように思われる。そのような苦闘が彼の詩の本質を成し、ここで取りあげた『聖なるソネット』に示されたダンの葛藤の根源にあるのではないかと思われる。

## 注

- 1) Aldous Huxley, *Texts and Pretexts* reprinted in *George Herbert and the Seventeenth-Century Religious Poets* selected and edited by Mario A. Di Cesare (New York and London: W. W. Norton & Company, 1978), p. 233
- 2) *John Donne The Divine Poems* edited by Helen Gardner (London: Oxford University Press, 1952), p. 36
- 3) Izaak Walton, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson* edited by George Saintsbury (New York & Tronto: Oxford University Press, 1927)
- 4) *John Donne The Complete English Poems* edited by A. J. Smith (London & New York: Penguin Books, 1971), p. 625
- 5) Stanley Fish, 'Interpreting the Variorum' reprinted in *Modern Criticism and Theory* edited by David Lodge (London and New York: Longman, 1988)
- 6) T. S. Eliot, *George Herbert: Writers and Their Work* reprinted in *George Herbert and the Seventeenth-Century Religious Poets*, p. 238
- 7) ビーター・ミルワード, 『ジョン・ダンの「聖なるソネット」』(東京: 荒竹出版, 1979), p. 73
- 8) William Shakespeare, *Hamlet* 3. 3.
- 9) Louis L. Martz, *Donne and the Meditative Tradition* reprinted in *Essential Articles for the John Donne's Poetry* edited by John R. Roberts (Hamden: The Shoe String Press, Inc., 1975) p. 147
- 10) We are but farmers of our selves, yet may,  
If we can stock our selves, and thrive, uplay  
Much, much dear treasure for the great rent day.  
(To Mr Rowland Woodward, ll. 31-33)
- 11) Gardner, *John Donne The Divine Poems*, pp. 121-7
- 12) T. S. Eliot, *George Herbert and the Seventeenth-Century Religious Poets*, p. 238

(1996年9月30日受理)